必然的に片倉家臣千四百六

戸、七千四百余人は親孫

は附部美震守二十万石が十 れている。白石片倉領一群 商に城級・所替などが行わ

二万石に残禄の上、白石城 に転封入城するにおよび、

浴、ことに会理松平家を吊

終結とともに東北・北越路 城主であった。戊辰戦争の

た武士に自吾 が、禄を失っ 入植を行った

同様であり、想像を絶する

Ø

は東北・北越諸器いずれも

ものであった。

生活の都を得るとともに北

万警備に役立つことを政府

前田権少国への書信に如実

武田少多事より東京出張所

下侯段深琴感戴一同雀躍當

五月中ラ期トシ乗船仮地へ

では、北海道開拓に従事し

このような状況で自己を

い生活を続けていた。これ 仙台領内で俸禄もなく苦し



謀蔵 塚本

(略)一日一秋ノ思テ成

番船ラ相待兼居侯 401 (20) 白

窓 (一万八千石) は初代長

仙台器一家片倉小十郎邦

たまわり、

明治三年(二八

七〇年)。自致

在の啓別市)を太政官より

乗船を待つ白石藩士

網から数え十一代目の白石

開拓使哲区 の入値を嘆願 あった。この 入植は困難で として自石村 ため政府依存 二月「北紐酒 し、明治四年 御報有之度候也 帳七無(略)餓死二及候卜 任合中ニモ布団ハ元ミリ蚊 石川へ出帖ヲ釣聊ノ元却鉄 大二心痛配在侯(路)至為 ヲ以テ家内共水粥ヲ喫スル 六月十日

のの、移住費用の給費の問 六百人の入植が決定したも (現在の札幌市自行区)に 移住業務のおくれなど 省への再類都が提出されて いる。 その後、角田県より民部

安な日々を送っていた。こ の状況については、角田縣 から人植の知らせもなく不 難段々情実個而祭別花御鈴 **畿ラ以テ開拓便賀属ニを成** 、略)六百人員尤疲弊困

遅れた出帆

シ丁壮ハ窃盗ラ為スルニ三 ル (略) で打捨配候而ハ老幼ハ餓死 移圧可成名/処(略)其マ 七月

移住者、角田県、開拓使、 寒風沢に回航さす

期待と不安乗せ 次のようにある。 者にもたらされた文書には せている。角田県から移住 き、突然、開拓使は成臨丸 も日数を要し、お互の言い 経過があり、大街の往来に 政府間の連絡誤整に時間の を松島湾内寒風沢に向かわ た者も出た。そのようなと あ言らめ他に転出していっ た。移住者の中には入植を 分に一般道を欠くこともあっ 住せよとの報である。それ

早打二而出張縣工申来此 一郎殿会 日々であったと思われる。 った。この西館は四縁の戊 向かう意欲と複雑な緊張の のための船留めであった。 の航海に不安と夢を乗せ、 (札幌白石高教諭・郷土史 秋深まる季節の北海道

日、六日、七日之内出記(略) 被仰波為迎之被多候依而五 国為引移候係東京ヨリ跋印

も三日間。無理であったが、

何の前ぶれもなく急に移

人の下船者もなく

月十二日であった。 風沢を出帆したのは旧暦九 四百一名成臨丸に乗船し集

十七日函館に入港、鼠符ち なく全国乗船し、出帆を存 ているが、一名の下船者も 無理と思われる者には下船 と同時に船旅の疲れで発掘 し容まで符つことをすすめ その間、悠冷地に向かうに した者、妊婦に対する休息

計太村语言毀外壱人成臨丸 度開拓便宮園林敬